

*題名中に書名が出現する場合は、引用符「」で囲みミタリック体を使用しない。

六 投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は字句の訂正に留め、組版面積に影響を与えるような改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日まで返却されない場合は責とみなす。

八 刷り上り五印刷ページ(四〇〇字詰原稿用紙で一二枚)までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし実費で作製する。別刷希望者は校正刷第一頁の上方に部数を朱書すること。

一〇 原稿の送り先

二一三 東京都文京区本郷二丁目一一

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学雑誌編集委員会

編集後記

春の学会で講演を聞いた内容を盛った投稿がぼつぼつ寄せられています。しかし、抄録号にある程度でなく、しっかりした原著や研究ノートの形でぜひ読みたいと思う演題が、耳で聞いただけで終わってしまうケースがあまりにも多いと感じるのは私だけではないでしょう。論文の形にまとめるにはもうひと苦労が必要なのですが、どうかそれを乗り越えての投稿をお待ちしています。

原著・研究ノートには審査(学会誌によっては「査読」などとも呼んでいる)の過程が入りますが、審査をお願いする先生には「定説のないものについては著者の創意を尊重する方向で処理して頂くよう」に書面でお願しております。

医史学というものは、ある意味では時間や空間を越えた出会いの体験であると言ってもよいように考えます。そういう史料や人との出会いの体験についても、ぜひ語って頂きたいと思っております。形式は随想であっても、原著・研究ノートのほかにこのような記事のあることは、決して学会誌の質を低くするものではなく、読者を裨益する場合が少なくないものと信じます。これは一例に過ぎませんが、こうした内容のものは親しい人に語りかける調子でご投稿下さい。

梅雨明けの猛暑のもとで、新発足の編集委員会は本年度最終号の編成に取り組んでいます。本号がお目に触れるころには風に秋の気配が漂っていることでしょうか。

(三輪 卓爾)